

き しゃしんじゆつ 気づきの写真術

しゃしん みかた わ よ しゃしん わ
写真の見方が分からない、どういのが良い写真なのかよく分からない、
ひと さくひん ほんだん なに じょうぎ
という人がいます。作品を判断するのに何か定規のようなものがあって、
あ じぶん しゃしん よ あ わ
それを当ててやれば自分の写真の良し悪しが分かるのではないか、というの
です。

いっばん じぶん み ひと つた ほうほう ことば はな ぶんしょう
一般に、自分が見たものを人に伝える方法には、「言葉で話す」「文章に
つた えいぞう つた みつ いっけん べつ
して伝える」「映像で伝える」の三つがあります。一見、それぞれ別のよう
み じつ はな ぶんしょう よ あたま なか
に見えますが、実は話しているときも文章を読んでいるときも、頭の中に
ないよう えいぞう う えいぞう はなし ぶんしょう ないよう
は、その内容が映像として浮かんでいます。映像は、話や文章の内容や
ひょうげん か つぎつぎ か ことば はな
表現が変わるにつれて、次々と変わってゆきます。言葉で話しているとき
も じ よ えいぞう れんそう ぎやく しゃしん
も文字を読んでいるときも、映像を連想させているのです。その逆が写真
しゃしん えいぞう も じ ことば かん
で、写真は、映像から文字や言葉を感じさせてくれるのです。

ひっしゃ しゃしんてん しんぶん なか おも しゃしん であ じぶん
筆者は写真展や新聞の中で「いいな」と思う写真に出会ったときは、自分
しゃしん み しゃしん とら ぼ た あ
はいま写真を見ているのではない、写真が捉えたその場に立ち会っているの
おも ひと と いっぼ ひ
だ、と思うようにしています。人が撮ってきたモノとして、一歩引いたとこ
かんしょう じぶん おな げんぼ み
ろで鑑賞するのではなく、自分も同じ現場でこのシーンを見ているのだと
かんが がめん なか ひと こえ しゅうい おと にお
考えるのです。そうして、画面の中の人の声や周囲の音、匂い、モノの
かんしょく そうぞう
感触まで想像するのです。

しゃしん たん かみ うえ にじげん せかい かた あじ そ け
写真は、単なる紙の上の二次元の世界で片づけてしまうと、味も素っ気も
ないものになりますが、映像の中に入り込んでみると、まるで生きているよ
うに活気づいてきます。いい写真だな、と思ったら忍者のように作品の中に
もぐり込む、孫悟空やドラえもんになって自由にその空間と時間を飛び回っ
てみるのです。

しゃしん じっさい しゅんかん きろく み
写真は実際にあった、ある瞬間を記録したものです。まだ見たことのない、
めずらしい風景や人々の生活の場に直接つれていってくれます。古い
アルバムを開け、祖父母といっしょに写っている写真にもぐり込むと、子供
の頃に戻って祖父母の声が聞こえてきます。

よ しゃしん うつ せかい はい
良い写真とは、そこに写っている世界に入ってみたくなるような、あるいは、
知らないうちに、われを忘れて写真と話し込んでいるような、画面の中
からいくつもの言葉が聞こえてくるような写真のことをいうのではないでし
ょうか。

(石井正彦『気づきの写真術』文藝春秋による)